

## 令和7年度人と自然の博物館協議会（概要）

日時：令和8年2月20日 10:00～11:30

場所：県立人と自然の博物館 大セミナー室

### 1 報告事項

- (1) 令和7年度ひとはくの活動内容
- (2) 中期目標の達成状況
- (3) ひとはくにおけるDEIの推進について

### 2 議事

令和8年度ひとはくの主な事業について

### 3 以下、質疑応答の概要

委員)

資料1の11ページ、中期目標の重点目標2の連携団体数については、毎年目標値200には、新規や継続のものがあると思われるが、それぞれのカウントの仕方を教えていただきたい。

博物館)

連携団体は年度ごと登録を要する制度としており、継続的な活動の意思を確認した上で、年度ごと申請いただいている。新規での連携活動グループの申請については、館内審議を経て登録数としてカウントする。新規か継続かの内訳数のカウントは現時点で正確な数値が把握できていないが、館内審議数をカウントすることによって、一定の新規認定数を把握することは可能。

ただ、地域連携活動グループとは別に、各研究員がフィールドで一緒に活動している団体、たとえば研究や調査、地域シンクタンク活動である地域に入る際、それぞれの地域で活動している団体や行政機関も団体数としてカウントしており、その分の新規・継続の内訳は研究員ごとの活動状況によるため、把握が難しいものもある。

委員)

キャラバン等で外に出ていく活動も博物館の大事な任務であり、これまでから盛んに行われているが、新規の増や地域ごとの広がり等の状況分析を行うことによって、必要な対策が取られやすくなると感じる。ぜひ今後を検討する上での課題等、既にどのように把握されているか。

博物館)

地域の広がりや地域展開度として館内で集計しており、兵庫県下の合併後の現市町単位でどこに行ったかを把握し、第5期中期目標の集計期間である令和5年度から今年度までに兵庫県下すべての市町村に行き、地域展開度100パーセントを達成している。

委員)

そういったことも今後は報告の中に入れ、積極的にアピールしてはどうか。

委員)

連携活動グループとはすごく特殊な活動だと思っているが、これは具体的にどんな活動をしている人たちなのか、一般に公開されているものなのか。

博物館)

個々の情報はホームページには公開されていない。研究員と共同で調査・研究するような団体・グループもあれば、セミナーのようなアウトリーチを共同で実施している団体もある。中には標本資料の整理を手伝ってくださる団体もある。

委員)

一般の方が、こういう活動に参加したいときは、どうすればどうすればよいのか。

博物館)

もともと研究員と関わりのある方を中心に、お仲間を誘っていただくという形が多い。

委員)

イベントやセミナーでつながりができていて、参加するということが。

博物館)

いわゆる一般の博物館ボランティアとは形が違い、個人ではなく、グループとして「人と自然の博物館」と協定を結んでいただき、研究員とグループの信頼関係が築けた段階で認証して活動開始、という形になる。

個人については、地域研究員という形で、研究員と調査収集活動に携わっている方が多い。

委員)

私は中学校に在籍しており、様々な実施されている取組の中で、特別支援に関する取組を非常に興味深いと思っている。

実際の特別支援での様々な体験活動で、人博に赴くこともあるのだが、先ほどの報告で、水を飲むスペース等のハード面、より参加しやすいような施設となるよう整備を進めていることを知った。特性のある子たちへのアプローチ、実際にされていることについて教えていただきたい。

博物館)

触れる展示物を少しずつ増やしていき、4階展示室にはたくさんの触れるアイテムを置いたミュージアムボックスというものを用意しており、なかなか言葉で説明できなくても、音が鳴るのか、触ってやわらかいのか硬いのか分かる。

十分なPRが課題であり、特別支援学校の遠足の下見の際に、こういうものがあるので活用してくださいとお伝えするものの、学校全体への情報が共有されず、来られたときに素通りされてしまうこともある。実際に研究員が帯同することによって、具体的な楽しみ方をお伝えすることで、すごく満足度が上がるというのが、ひまわり支援学校での遠足対応の時にわかった。

そのほか、当館では特注セミナーというものを用意しており、これは特別支援学校に限らないものであるが、全ての団体から、こういうアクティビティを提供して欲しいとの申し出に対して、たくさんのメニューを示し、研究員等で対応している。泥団子や葉っぱのフロッタージュや、アンモナイトのレプリカ作りなど、直感的に触って楽しめるもの、言語によらないでできるものを用意している。

その際、感覚過敏の子がいる場合はどうしたらいいか等、一緒に特別支援学校の先生方と相談しながら、こういうやり方ならできるのではないかなというような対話を通じた提案も色々させていただいているところである。

ハードについては、やはり、まだ展示室の中そのものが古いものもあるが、企画展や、小規模な展示改修に合わせて、対応できるようにしていきたいと思っている。

委員)

1階から4階のアクセシビリティの確保、前からの懸案であるが、こういったお話と一緒にしていく必要があるかなと思う。

委員)

先ほどご説明の第5次中期目標についてであるが、令和5年から9年度の達成率含めてご報告いただいたが、おそらくこの中期目標を策定した時にはアフターコロナがどんな形で推移していくのかまだ見極められないときだと思われる。

先ほどの目標達成率、例えばアウトリーチ事業実施件数ではR5からR9まで累計で449%という数値、入館の利用状況がコロナ前に戻ってきている、という話もあったが、策定時からの中間見直しの状況について、教えていただきたい。

博物館)

中間目標の見直しについては、年4回の活動報告会で進捗状況を確認し、現状に即していない項目や修正が必要な目標等を丁寧に議論しつつ、適宜見直しを行っている。その中で特に影響の大きい結果とか大きな現状との乖離があれば、目標変更か、その目標達成のために次年度意識的に活動するよう、館内で認識を共有しながら活動を展開しているところ。令和5年から9年度の間に設定した目標についても、その都度きちんと現状と照合しつつ適正な目標設定と活動の重点化というところを配慮しつつ活動している。今のところは、大きな目標変更は必要ないということで、この設定した中期目標、重点目標に即した活動を展開している。

博物館)

数値目標は、目安としてすごく重要なもので達成が必要なものではあるが、逆に、数値だけに引っ張られることは望ましくない。複数ある意見の一つ一つが同等ではなく、具体的な問題や重大な成果の有無等を共有し情報を出し合い、それらを館内でつなげるということに努めており、(数値目標は)あくまで目安であるということをご理解願いたい。

委員)

数多くのセミナーを構成され、熱心に取り組まれてることに大変敬服しているが、その中で特に教職員指導者セミナーについてお伺いしたい。

考古博物館でも、今後、小中高の先生方に向けたお話もしたいと思ってはいるが、先生方は多忙で、やってもなかなか来てもらえないのではと二の足を踏む思いがある。

教職員指導者向けのセミナー受講奨励にかかるノウハウや実績について教えていただきたい。

博物館)

当館としても、学校の先生方にお越しいただきたく、夏休み中も多忙な先生のため、セミナー開催時期を7月下旬に設定している。今年度は開催候補として8月上旬にも選択できる日程を拡大した。とはいえ、なかなか小中高特別支援学校いずれものニーズを満たすことは非常に難しい、ということを感じている。

昨年度から、X(イクス)での広報を開始しており、若い先生方がその情報に気づきお越しいただいたという事例もアンケート結果から見受けられる。

学校の方に周知依頼した場合には教頭先生等へのご負担も承知しており、様々な手段を模索しつつ、有効な広報活動に努めていく。

博物館)

ひとはくでは、こちらから出かけて行く形での活動を数多くしている。

三田市の「ひとはく」に来ていただくというだけでもご負担になる先生方も多く、幼稚園保育園のそれぞれの園内、あるいは地域で研修をしないといけない場合には、こちらから出かけていく、そういうスタイルが学校のほうでもできるのではないかと、というような取組の検討余地があると考えている。

委員)

ひとはく活用術に記載されている「学びを深化させる」という欄にある「中高連携」とは、どのようなことをされているか教えてほしい。

博物館)

中学校や高校と当館との連携を指しており、県立有馬高等学校とは、年8回開催の当館一般セミナーを受講いただいております。人と自然科1年生が受講する中に、場合によっては一般受講者も数人入る。県立大学附属中学校・高校との連携もしており、当館の研究員が年間複数回、県立大学の附属中学発表に関わりながら、指導しているという取組が主なもの。

委員)

今のことに関連して、丹波の森公苑でも、なかなか中学校、特に高校は忙しくて連携が難しく、この中高連携8回は、具体的にカリキュラムを組んでされているのか、単発的なのか、その辺りお

聞きしたい。

博物館)

簡単に言うとカリキュラムで、委員の方のお手元配付の年間スケジュールにあるアルファベット H で表記しているものが、年間 8 回設定しているもの。

有馬高校は、今年度の今時点で、次年度人と自然科の 1 年生約 40 名の受講スケジュールを組まれており、学校の 5・6 時間目の時間帯を使って当館まで約 2 キロ歩き、このセミナー室での研究員による非常に幅広いジャンルの講座を受講。このセミナーは一般の方にも受講可能とホームページ上で公募しているため、一緒に受講いただくこともあるというもの。学校の先生と年間スケジュールの調整をしながら行っている。

委員)

学校の先生の多忙について発言があったので、私からも。

1 つは、私が今所属してる立命館大学では、大学院生、特に集中講義はフルオンラインになっている。海外留学或いは日本全国に学生がいるので、来てもらわなくてもできるように集中講義を組んでいることがある。絶対きてもらわないとできないことは実はすごく少なく、先生たちに対する教職員セミナーに関してですが、来館をするにもあらかじめオンデマンドの教材を見てもらって置いて実際の対面で 90 分議論するとか、自分で何かデータを持ってきて、そこで皆で議論をするとか。もちろん、対面することの意義は非常にありますが、一方で忙しい方々に対しても、もう少しオンラインを活用するやり方というのを想定されてはどうかと思う。私も実際、今回 14 コマ持っていますが、非常によく設計されていて、最後みんなで実習をして評価しするところまでできた。先生たちに来てもらうときに絶対対面じゃなきゃいけないわけじゃないと促すことも 1 つの手法かなと思いつきながら皆さんの話を聞いていた。

2 つ目は、一方で、だからこそやっぱりリアルな質を高める必要性は今とても高まっている。というのも、1 年前の今頃の時期に社会科学のシラバスを組んだ先生たちが、1 年後の現在何を感じているかという、生成 AI がこれほど進むと思わなかった、ということ。生成 AI の活用が進み精度が上がりすぎ、レポート評価が非常に難しくなっている。その問題をどう考えるか、今大学教育で非常に重視されていて、その中でデータサイエンス、社会学自然科学データサイエンスという枠組みで言うと、やっぱり自分の手でデータを取ってきて、自分で分析するというその泥臭いところをどれくらい教えられるかという授業設計が、非常に重要になってきている。来年度以降、もうレポート課題をやめるといふ先生たちも増え始め、持ち込みゼロでその場でテストを受けさせるとういふうには今は逆転してきている。今申し上げたように、オンライン、オンデマンドでやるという設計と、完全に質を高めていく設計、ひとはくも結構若手の先生方が増えておられるので、ぜひその質を高めるやり方を、例えば研修する、相互に学び合う、何か質を高める方法をちょっと頑張ってもらおうと、今やってるコンテンツはフルでできてると思うので、やり方とかをちょっとずつ工夫するとまた現代にどんどんフィットしていくのかなというように感じた。

委員)

三田市内の理科の作品展や、私は実は教職 34 年で新任のときに博物館ができ、以降ずっと授業展開や三田市内の理科作品展等で館とは関わりをもち続けてきた。

今の三田市の小学校の理科教育の現状を話させていただくと、各小学校 20 校の理科担当者会をしたところ、理科の授業を持ってる先生はたった 6 人、理科の担当者として学校代表してくる人が理科の授業をしていない。兵庫県では「兵庫型学習システム」で非常勤の先生を配置され、校長退職後の先生等の非常勤の 1 年単位の会計年度任用職員が理科の教科担当をしており、「専門的な知識を持つ理科専科」としての措置とはいえ、実際のところ 1 年や 2 年でやめる方が授業を行い、正規の教員が理科の授業をしていない。その 6 人中 3 人は新任で、なぜ新任の先生かという、兵庫型学習システムの非常勤が配置されても、持ち時間数の関係で高学年の授業に限られ、新任の先生は 3 年生を担当することが多いため、学校の理科代表で担当者会出てくるという状況。

そのような状況の中で、本当にたくさんの講座が開かれ、私自身は大変興味があって参加させたいと思うものもたくさんあるのだが、新任教員が新任研修の一部として参加するに留まっているというのが実情で、実際に理科が好きとか授業に活かそうと参加する者が本当に少ない。

管理職や理科担当でも、何とか先生たちに理科の面白さを知り授業に活かす講座等に参加させたいと思っているが、なかなか思うようにいっていない。

インクルーシブの取組についても、子供たち、車椅子で移動している子供たちに、触らせるという感覚を使うというのはすごくありがたいなと思っている。

たとえ体は動かなくてもそれ以上に感受性がすごく高く、色、物の形や感触はとても心に響き、理科の目標である「実感を伴った機会」が少なくなっている今、そのような展示をたくさん用意していただくのはすごくありがたいなと思っている。

ここにはたくさんの木の椅子があるが、もっと気楽に触れられるようなものや、音を鳴らせるとか、様々な色や言語にまで、広がりを持つような展示が増やしていただけたら嬉しい。

また中学生、高校生については、部活動の地域移行として、例えば、平日ではなく土日に子供たちを集めて、観察会をすとか、例えば、鳥では、その写真を集めるグループとか、そういう何か新たなことをやっていただけたらなと思っている。ただ先ほどのアウトリーチがもう非常に数が多いというのは、実は現場は、そういう実感を伴った理解を要望しているので、今後とも沢山企画いただきたいと思う。

委員)

我々のNPO等でも課題となっているのは若手の職員の教育で、いろんなスキルアップの機会を作ってはいるが、反面その社会的課題をどうするのかとか、その地域の課題を見つけてきてそれをいろんな方とつないでいって、どうしていくのかという点等、なかなか難しい。

人博は過去からこれまで、様々な地域の方々と連携しながら、多様な研究等されているが、地域課題に対して気軽に参加できるようなセミナー等の取組について、お伺いしたい。

博物館)

地域課題に対応する博物館の活動として、次年度の事業計画にも記載の南淡路と龍野で行う地域連携セミナーが挙げられる。2、3年をかけてしっかりパートナーシップを築き、地域資源の課題を掘り下げ、連携先と共同しながら、セミナー等を開催するというもの。

今後はその取組を発展させ、調査研究・セミナー・展示・地域課題を解決するシンクタンク機能とを連携し、2、3年をかけて各地域をめぐる、様々な主体と一緒に地域課題に取り組みつつ、研究員もその資源を活用し、地域づくりや課題解決と併せて研究も展開するというような、一体型のプログラムを展開しようと考えている。

その中では、決め打ちで地域に入るということもあるが、そこで出会った人といろいろ課題を共有しながら、出会いを大切に、地域に根差したシンクタンク活動を展開していければと思っている。学校や行政機関だけではなく、民間企業やNPO等も対象とした活動にしていきたいと考えている。

委員)

まずはこの新しい冊子、ひとはく活用術のパンフレットについて。

人博には未就園児未就学児の来館がとて多く、その保護者はSNS世代、ぱっとみてわかりやすいというのが、とても大きな興味関心に繋がると思う。どんなことをしているのかがとてもわかりやすく、人博ではこんなことができるんだという1つの提案になっていて良い。

人と自然の博物館の強みは、そこに人がいるということだと思っている。私自身がいわゆる障害を持つ子供の不登校を経験し、その間子供を連れて人博に来た際に誰かが関わってくださり、実はその方は研究員の方だったことを後で知った。その先生が虫を教えてくれたり、外に連れて行って葉っぱを触らせてくれたり、教室に入れなくなった子を、学校とは違う所が興味関心を芽生えさせてくれた。

それがこの博物館の良さ、強みであり、そういう方が身近にいる、そしてこの三田市のフラワータウンにあるということだと思っているが、残念ながら実は私たち市民が知らないことが多いのではと思う。今回の新たなパンフレットを活用して、自然や共生を求めていく先生方に出会える輪がどんどん出てくれば良いなと思っている。

委員)

本日人博のDEIの推進の話を伺い、これまでひとはくのサービスが十分に行き届いていなかった人達に対して、新たなサービスを提供し始めていることが大変よくわかった。

限られた予算の中で、できることから取り組まれていると思うが、やはりこれからはアウトリーチをもっと推進していただきたい。常に新しいことにチャレンジするというのが人博の真髄だと思うので、ぜひ県の方にもしっかりと予算をつけていただき、この新たな取組の推進を力強く押して

いただけたらと思う。

あともう1つ、先ほど村上館長の方から、中期目標の数値は、重要ではあるがあまり気にしすぎると良くない、やってきた成果をきちんと共有するということが重要だというお話があり、そのことに大変共感した。一方で、外から見ていると、人博の活動の成果は見えにくいところがあるため、館内での共有だけではなく、随所での情報発信を積極的にしていただきたい。

そういった中、人博活用術のパンフレットは今までにはなかった新しいスタイルでとても面白く、人博の活動の全体像が非常にわかりやすく書かれており、研究員の方の専門分野が書かれていて、推し活をしたくなるような魅力を感じたので、ぜひこのパンフレットが今後どのような形で活用されていくのかを見守りたいと思う。

委員)

DEI の話を聞き、改正博物館法に定める新しい役割としてまちづくりや福祉等との交流、資料のアーカイブ化等まで、最先端を行っていると感じた。

予算の話もあり、今日は県の課長さんもうらっしゃっていることですし、しっかりお聞きいただいておりますので、いろいろご配慮をお願いしたい。

委員)

人博活用術が大変見やすく、全体のされてることがよくわかるなと感じた。

当センターでは、未就園児の行く場所が少なく、特に屋外での活動場所が少ないのではと感じられるため、今後は乳幼児向けのイベントを少し強化していくことにしている。

特にお父さんお母さんで自然に触れ合う機会が減ってきていると聞くので、そういった遊びの提供を当センターでもできたらと考えているが、特に乳幼児は幅が広く、0歳児から5歳児の中でも、ターゲットを絞る必要があり、できなかったと行ってがっかりして帰られるお母さんがおられたりということも、当センターのイベントでは経験している。

大変スポット的にはなりますが、今後の当センターでのイベントを計画される際の勉強のため、対象の絞り方等何かあれば教えていただきたい。

博物館)

人博ではそこまでできていないが、有馬富士自然学習センターで行っている乳幼児の就学児セミナーに、0・1・2歳児だけを対象とするプログラム「こつぶっこ」があり、平日の午前中等に実施すると大きい子らが混ざらないために安心して活動ができると好評と聞いている。

委員)

今回 DEI の取組を説明いただき、心が動かされた。物や事に対し、接することで何かしらの感情が動くという経験を大事にしている点、その中でもこのポジティブな感情だけではなく、ネガティブとはいかないまでも様々な感情が動く経験というのが、まさに今の子どもたちや若い時代にも課題となっているのかなと思う。好奇心は、探求心や思考力を育てる取組にすべて繋がっているんだということを感じている。

また、教職員指導者セミナーについても、私は幼稚園保育所、保育者養成が専門であるが、学校まで来ていただいて研修いただいております、ありがたく思っている。

実際に物に触れる経験というところで、博物館内でも来館者の親子に対する対応がその質を高めるための1つの大きな視点になると思う。親子での来館者に対する研究員の方たちがされる言葉がけや接する工夫等、客観的な指標だけでなく、質的な評価等をどう高めていくのかということ等が必要になってくると思われる。

セミナーのアンケート等を取られてると思うが、その満足度や課題、何か見えていることがあれば、教えていただきたい。

博物館)

研究員から来館者への声かけは、研究員その人のキャラクターにもより、館内を頻りに巡回し声かけをする研究員もいるが、常時の来館者対応職員としては、館内に配置しているフロアスタッフがいる。彼らの声かけのスキルは非常に高く、人を良く見、詳細を知りたいと思っていると感じれば躊躇なく研究員に繋ぎ、研究員が出て行き、オープンなサロンで、リラックスして話が聞けるといような対応をしている。

博物館)

触察の件、物を置いていてもなかなか触っていただけないという実態を踏まえ、最初は恐る恐るから、だんだん大胆に触っていただくよう、ファシリテートする機会を作ることもするようにしている。

当館は事前申込の必要なセミナーだけでなく、来館者がフラッと来たその時間に体験できるオープンセミナーを数多く用意しており、触察展示物を一緒に触ったり、実験や工作等研究員と来館者親子との接点の多いものがたくさんあり、DEIの取組評価前から盛んに行われてきた。今回DEIの方針を掲げたことにより、さらに明確にその意義が高まってきたと理解している。

今後のプログラム開発においても、博物館に来る楽しみを増やすという視点で、3Dプリンターを使った触察展示物の作成等の取組も今進めようとしているところなので見守っていただきたい。

博物館)

セミナーのアンケート結果については、受講後にアンケートを回答いただける方というのは、高評価の方が多く、アンケートに改善点や課題を書かれる方が少なく、回収結果からは把握できるものとしては、もう少し時間が長い方がいいとか、日程を集中した方がいいとか、屋外での活動場所が増えたことの意味等。

今後はアンケート内容を精査し、具体的な課題、本日の意見の中にもあったようなオンライン等の開催方法等、様々な声を拾いつつ改善に活かしていきたいと考えている。

委員)

理系人材の不足、その中でも理系女子の不足ということがかなり叫ばれている中、理科教育の重要性はますます高まっていると思っている。人博の取組がさらに充実したものになり、理科好きの子供たちの増加につながることを願っている。

委員)

これまでから人博の頑張りを十分わかった上での委員の皆さんからのご意見を受けとめていただき、これからも引き続いてご活躍いただくことを期待している。

(了)